

お互いの笑顔を忘れない 福島生産者との交流



ぶどう畑で記念撮影する産直センターふくしまの生産者と、みやぎ生協・コープふくしまの組合員。

コープ東北サンネット事業連合の産直産地である産直センターふくしまの収穫体験ツアーが始まったのは2009年。3年目の11年は東京電力福島第一原子力発電所の事故による農作物への影響が盛んに報道された大変な時期でしたが、「今年も交流ツアーをしてほしい」という生産者の声に応えて原発事故のあった年も含め毎年、収穫体験の交流を続けています。



ずっしりとした手応えのピオーネに参加者も思わず笑顔。

震災から4回目の収穫の秋を共に喜ぶ

福島市街から車で30分ほどのぶどう畑。9月半ばの爽やかな日差しの中、「サンネット産直」の収穫体験ツアーに参加したみやぎ生協とコープふくしまの組合員37人は、果樹が整然と植えられ、光が差し込むぶどう畑に入っていました。

農事組合法人の産直センターふくしま・ぶどう部会部会長の遠藤茂さんは「今年は雨が多くて虫にやられた畑が多かったのですが、ここはナイロンシートで雨露をしのいでいるので大丈夫。今年の出来は良いですよ」と鈴なりのピオーネの生

育ぶりに胸を張りました。

「1人2房までどうぞ」という声で、参加者はピオーネを手にする。と、そのずっしりした感触に思わず歓声を上げました。この日収穫したピオーネは、ツアーの約2カ月前に、コープ東北サンネット事業連合の職員有志がボランティアで袋掛けを手伝ったものです。たくさんのお米の実をつけたピオーネを両手に、参加者の笑顔がこぼれました。

「より良い福島を」 諦めない生産者

「私たち生産者は、皆さんとつながっている限り決して諦めず、頑張ります」

震災直後、11年のツアーを、産直センターふくしまの阿部哲也理事長がそう言って締めくくってから3年がたちました。

同センターの参事・服部崇さんは、昼食会場となった福島市鳥川



産直センターふくしま参事の服部 崇さん。



鳥川の集会所での昼食会。産直センターの婦人部の手作り料理と甘酒が好評。



豊水を手にするみやぎ生協メンバーの市川さん母娘。



産直センターふくしま理事長の阿部さん夫妻。
「つなぐっていけば わたしたちは負けんない」は震災・原発事故以来の合言葉。

の集会所で、昨今の状況を次のように説明しました。

「復興を応援する趣旨での取引が少なくなつて、農業収入が減つた生産者が少なくありません。原発事故前との収入の差額について、補償の交渉も難しくなつてきました」

また、農作物は畑ごと・作物ごとにきめ細かく放射線量の検査をして、すべて検出限界以下であることを確認しています。こういった検査や原発事故への対策の費用については生産者の負担を免除するよう、地域の生産者が一緒になつて行政や

東京電力に訴える傍ら、太陽光発電に取り組み、300世帯分の発電を指すなど、この地で生きていくという力強い意思が生産者にはあります。

除染作業で出た土の処分をはじめ、課題はたくさんありますが、商品として扱える作物も増え、「よい良い福島をつくつて、子どもたちにつないでいきたい」と語る服部さんの姿には、福島の生産者の粘り強さが感じられました。

作った人とのふれあいで おいしさもひとしお

昼食会では地元食材で作ったおにぎりや浅漬け・野菜汁・肉じゃがに、つきたてのお餅などが振る舞われました。甘酒も振る舞われ、米と麴の自然な甘さに「これ、どこで手に入るの?」という声があちこちのテーブルで聞こえました。

野菜汁や肉じゃがも野菜のしつかりした味が楽しめましたが、「このじゃがいも、俺が作ったんだ」とうれしそうに話す生産者の方を前に

すると、その味は格別です。みやぎ生協のメンバー（組合員）の市川則子さんは、「おいしいものを生産者の方と一緒にいただける」と、3年連続でこのツアーに参加している理由を教えてくださいました。

昼食後に向かった果樹園では、阿部理事長ご夫妻が参加者を出迎えてくれました。青空に映えて実る大きな梨に「すごい」の声があちこちで上がる中、「梨は枝の上を持ち上げるようにして取ってください。オレンジがかった色のものがおいしいですよ」と阿部さんは収穫の仕方をアドバイス。みずみずしい梨を味わい、たくさんの中から「これぞ!」と思うものを手にする姿があちこちに見られます。この感動を持ち帰ろうと、宅配便でのお届けで梨を購入する人も列を成します。

最後に参加者は、この日の気持ちを寄せ書きに記しました。多くの生産者がそうしているように、産直センターふくしまでも、消費者からの寄せ書き・メッセージを、事務所のいつも見えるところに飾っています。

「いつもおいしいものをありがとうございます。また来年も来ます」

福島の生産者の頑張りには、この言葉に支えられているのです。

くらしの不安の解消のために 仲間とつながり 学びの場を広げる

生協のライフプラン・アドバイザー*（以下、LPA）は、保障の見直しなどの組合員向け学習会などを企画・運営し、その講師や進行役を務めています。くらしの不安を解消するため、東日本大震災後は防災についての取り組みも始めたという四国4生協のLPA合同研修を取材しました。

自分ならどうするか？

YES / NOを出し合う

震災が発生しました。小学校1年生の子どもの安否が不明です。あなたは学校に迎えに行きますか？

「家族それぞれがお互いを信じて行動する」という『津波でんでんこ』の考えがあるから私は行かない」



防災ゲーム「クロスロード」の進行役のこうち生協組合員LPA。明神智代美さん(左)と山根 幸さん。

「頭では分かっているけど、後悔したくないから私は行くと思う」

「そもそも私は自転車しかないから、行きたくても行けない」

コープえひめ本部の会議室で、ゲームの進行役が出した問いに対して、グループに分かれた組合員・職員が率直に自分の考えを述べ、相手の考えに耳を傾けます。持参した3日分の水と食料を、避難所で他の人に分けるかという設問では「隠れて食べるのは忍びない、弱い立場の人など優先順位をつけて配る」といった意見や「公平性を求められるのは行政の対応であって、まず、自分の家族を守る」など、YESとNOに意見が分かれました。

大震災での対応にあたった市職員にヒアリングして作られたゲーム

震災直後からしばらくの間、人はさまざまな決断を強いられます。阪神・淡路大震災の際の、神戸市職員の対応をヒア



こうち生協LPAが100円ショップで集めた防災グッズ。車に常備していると普段の外出にも役立つという。一人ひとりの「自助」が互いに助け合う「共助」につながる。

設問に正解はないからと説明しました。「クロスロードとは『分岐点』という意味です。今日の設問は実際に震災の時に起きたことで、事前にさまざまな状況をシミュレーションして備えていたことが、いざという時の行動につながります」

災害の備えの第一歩は
遊び感覚で楽しみながら

クロスロードではダメ出しは禁止。少数の意見にだけ耳を傾けられることが大事です。そして、「自分の考えていたことが通用しないかもしれない」ということに気付き、視点が変われば見方が変わることを体験できます。

意識はしていても、実際の備えができていない人は一部に限られます。身近なもので備えができることを多くの人に知ってもらおうと、山根さんたちは防災袋の中身を全部100円ショップで集めてみました。

普段から家族で話し合いましょうと言われても、そのような会話をする機会はありませんからこそ、家庭や学校で気軽に取り組めるゲームが有効です。10月にはPTAの依頼で小学生を対象に防災ゲームを実施し、今後は、消防や行政とも連携して取り組みを広げていきたいと、こうち生協LPAは意欲的です。地域のくらしの安心のために、地域とつながっていく組合員活動がここにありました。

* コープ共済連の所定の養成セミナー修了者。